

茶の湯文化学会会報 No.75

第75号 / 2012年12月18日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

第三十五回中国研修旅行記

中村修也

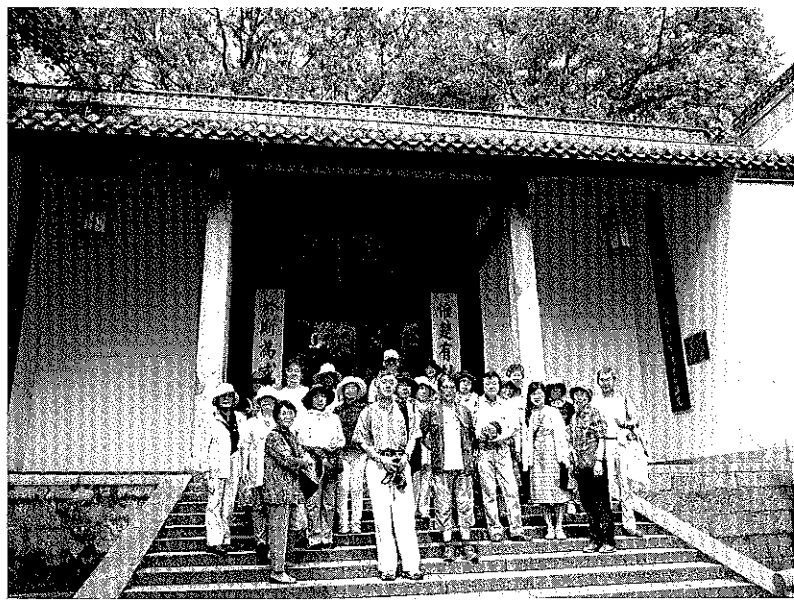
今回の研修地は湖南省の長沙と岳陽でした。
第一日は上海で東京組と関空組が合流して、国内線で長沙に飛びました。しかし長沙のホテルに着いたのは深夜で、初日からこのスケジュールのハードさは、少々厳しいものがありました。みなさん、ぐったりです。

八月二十六日

二日目は、朝から湖南大学に向います。湖南省は毛沢東の出身地です。毛沢東は湖南省湘潭県韶山村に生まれ、一九二二年、長沙の湖南全省公立高等中学校（現在の長沙市第一中学）に入学しています。それゆえ、今はあまり見なくなった毛沢東の石像が屹立していました。大学の構内が観光地になっていて、ここでの一番の見どころは、中国最古の学問所である岳麓書院と愛晚亭でした。

岳麓書院は九七六年に創建された学問所ですが、十一世紀初頭に講演・祭祀・藏書・学田の四つが備わり、中国一の大学院となったそうですが、今に伝わる壮大な図書館がみごとでした。多くの文人・学者がここに集い、また著名人の講義を聞くために集まったそうです。ことに朱子学で著名な朱子が講演を行った時

は、二千人の学者が集まったとのこと。廊下の壁面にはここを訪れた文人たちの記念詩が所狭しと掛け



長沙・岳麓書院

られていました。

愛晩亭は清の乾隆帝十七年（一七九二）に創建された別荘で、紅葉の見事さを読みこんだ杜牧の詩に「停車坐愛楓林晚」とあることから、愛晩亭と呼ばれるようになったとのことですが、まわりの庭園の風景はいまもみごとでした。

長沙で残念だったのは、湖南省博物館が閉館中で、行くことができなかったことです。そのかわりに馬王堆墓の発掘現場に行きました。生けるが如き女性のミイラを見るのは、ちょっと怖いので、それはいいとして、他の博物館は見なかったなあ、とみなさんも口に出さないもの思っていました。

八月二十七日

長沙から岳陽へ移動しました。途中、望城県銅官窯を見学するために向ったのですが、その村が大型自動車の村内侵入を拒むために、高さ三メートル制限のバーを設置したために、三度までもルートを変更しなければならず、なかなか銅官窯には行きつきませんでした。しかも、やっと到着したと思ったら、なんと「休館日」！全員がっかりして、あきらめかけた時にガイドさんがウルトラCを

使って、入館できることに。

ここは岳州窯の遺跡をそのまま博物館にした所で、登り窯の跡があり、多くの唐代の焼物が発掘され、展示されていました。その中でひととき人目を引いたのは、「青釉褐斑播鉢」です。この碗で茶葉を搾り、そこに湯を注いで、茶を点でて飲んだと説明されているものです。注ぎ口がありますから、この碗で搾った茶葉を点でて、他の碗に分茶したと考



岳陽樓

える方がよいかもしれません。とにかく、膨大な唐代の焼物の出土品と量に圧倒されました。

次に湘陰博物館を訪問しましたが、ここも明日開館ということで、まだ整備が終わっておらず、電灯もつかない状態で、岳州窯遺跡を懐中電灯で見なければならぬという有様でした。それでも会員の皆さんは、熱心に学芸員さんの説明に聞き入っていました。

昼食後、バス移動で岳陽に到着し、すぐに岳陽樓を見学しました。入庭すると、各時代の岳陽樓の模型がずらりと我々を迎えてくれました。そして城壁からは洞庭湖が見渡せるというすばらしいロケーションでした。しばし三国志の赤壁の戦いの場にタイムスリップした雰囲気を感じました。奥に進み、今も残る清代の岳陽樓に上り、ここでも毛沢東の詩文に出会いました。毛沢東の湖南省における存在感を再認識させられる思いでした。

八月二十八日

今日は瀟湘八景の「洞庭秋月」で有名な洞庭湖をフェリーで遊覧し、「君山銀針」茶の産地・君山に渡ります。君山銀針は緑茶タイプと黄茶タイプの二種類があり、黄茶の方が

高級で、年間生産量は五〇〇〜一〇〇〇kgにすぎないともされる貴重品です。ここではインスタクターさんの説明を聞き、工場見学をして、それぞれ思い思いのお茶を購入しました。説明は専門的になり、顧雯さんが通訳してくださいました。

その後、高橋鎮に向い、高橋銀峰茶の研究所を訪問しました。これは毛沢東が君山銀針に匹敵し、生産量も見込める新種として開発



洞庭湖

を命じたものだということでした。ただ、ここではパワーポイントによる説明をお聞きしただけで、工場見学もなく、お茶の購入もなかったもので、少し期待はずれでした。

夕食後、空路、上海へ向かいましたが、到着は深夜でした。さすがに疲れはピークを迎えました。翌日は、朝、空港に向い、それぞれ関空・成田を目指して帰国するだけです。

最後に、ここ連年、中国研修に参加して感じたことを書きます。研修は、関空組と成田組が上海空港で落ち合って、そこから中国国内線で目的地に向かうという方式をとっています。ところが、上海空港への到着時間が異なるので、どちらかが待つことになります。ここ数年は関空組が待つてくれています。その結果、初日に目的地に到着するのが遅い時間になり、睡眠時間も少なくなるという弊害が生じています。関空・成田双方から旅行会社の添乗員さんが付いています。それならば、それぞれ別個に目的地に直接向い、ホテル落ち合うようにした方が、ゆっくり休めます。夕食時に顔合わせをすればいいことですから、今後はそうした方法を探ってはどうかと思います。

また、今回は現地の茶文化研究会との合流

をしませんでしたが、これは失敗でした。やはり現地の研究会と連絡を取り、現地の方から探訪すべき場所を教えてください、便宜を図っていただいた方が、よいことがわかりました。ただ、研究会を催すとすると、それが時間が取られ、見学の時間が少なくなるので、現地研究者との懇親は、見学と夕食の場で行うようにするのが良いのではないかと思います。

今回は顧雯さんが、ガイドさんとは別に専門的な会話の際に通訳を買って出てくださいだったので、大変な便宜を得ました。これはやはり、研究者で中国語の話せる研究者が研修旅行に添乗して下さると、いかに助かるかが証明されたものと理解できます。今後の研修旅行でも、こうした存在を必須とする体制づくりが必要ではないかと思いました。

さらに担当理事が研修地についての情報が少ないと、学会員の方に説明ができないという不都合が生じます。それは自身の反省点です。旅行会社と緊密に連絡を取り合い、現地の情報をしっかりと把握することを自戒したいと思います。

「青磁茶碗」「馬蝗絆」の語義について

岩田澄子

(1) はじめに

『平家物語』における「金渡（かねわたし）」の条と、『源平盛衰記』における「育王山に金を送る事」の条は、平清盛の嫡男である平重盛（一一三八～七九）が、仏照禪師（拙庵徳光）がいる阿育王寺（中国浙江省寧波市）へ黄金を寄進した話である（ただし資料により寄進額は異なり、『平家物語』では金三千両、『源平盛衰記』では金千二百両となっている）。

そして、東京国立博物館に所蔵される「馬蝗絆（ばこうはん）」は、仏照禪師の「金渡の墨蹟」とともに、この金の寄進に対し返礼として贈られたという伝承がある、青磁の輪花茶碗である。

『角川日本陶器大辞典』（二〇〇二）では「馬蝗絆」について次のように説明されている。

「中国南宋時代、龍泉窯産の青磁茶碗。重要文化財。端正で優美な姿と釉薬の美しさによって、砧青磁を代表する優品であるばかり

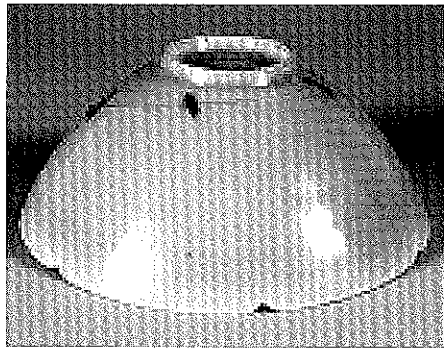
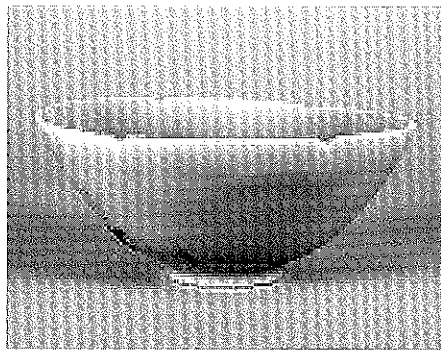


写真1（東京国立博物館ホームページより）

でなく、わが国に伝わる唐物茶具の中で最も古い伝承を持つことで知られる。

江戸時代の享保十二年（一七二七）に儒学

者の伊藤東涯によって著された実見記『馬蝗絆茶甌記』を伴っており、それによると、この茶碗は平重盛が宋の育王山に喜捨した返礼として時の住持仏照禪師から贈られたもので、室町時代に將軍足利義政（一四三六～九〇）が蔵するところとなったが、ひび割れがあったために、中国に送って代わるものを求めたところ、明代の中国にはこのような優れた青磁茶碗はすでになく、ひび割れに鏝（かすがい）を打って送り返してきた。この鏝を蝗（いなご）に見たてて「馬蝗絆」と名付けられたという。

また、東京国立博物館のホームページでも、「この鏝を大きな蝗に見立てて、馬蝗絆と名づけられた」と説明されている。

ところで筆者は、二〇一二年十月の茶の湯文化学会近畿例会で、天目茶碗と似た外観をした内金張り茶碗（三重県松阪市、射和文庫所蔵）について発表させていただき、その際に平重盛に関連する馬蝗絆についても触れ、碗名の由来に関する前述の説明を引用した。

すると、発表の三日前に汪玉林氏（北京外語大学教授）から、また発表後に倉澤行洋氏（神戸大学名誉教授）から、「馬蝗」と「蝗（イナゴ）」は、形も性質も全く異なるものであ

るといって指摘をいただいた。ところが、新たに「馬蝗」として示された動物は全く予想外のものであったため、筆者はすぐに頭を切り替えて対応することができなかった。

だが、その後改めて考察したところ、両教授が指摘されたように、「馬蝗」は本来の中国語の意味で考えることにより、碗名の意味がより納得できるのではないかと考えられた。そこで本稿では、馬蝗絆について概観しながら、「馬蝗」の本来の語意について考察することにする。

(2) 伊藤東涯「馬蝗絆茶甌記」(ばこうはん・ちゃおうき) 享保十七年（一七二七）

本題に入る前に、伊藤東涯（一六七〇～一七三六）が著した『馬蝗絆茶甌記』の本文から関連部分を確認することにする（傍線筆者）。

昔安元初 平内府重盛公 捨金杭州育王
現住仏照 酬以器数品 中有青茶甌
一事 翠光瑩徹 世所希見（中略）
慈照院源相国義政公得之 最其所珍賞
底有瑩一脈 相国因使聘之以送之大明
募代以侘貳 明人造匠以鉄釘六鈴束之
絆如馬蝗 遺覚有趣 仍号馬蝗絆茶甌

相国賜之其侍臣宗臨 享保丁未之春 予得觀之于宗臨九世孫玄懐之家（以下略）

この概要は前項でも触れたが、昔、安元（一一七五～七七）の初め、平重盛公は、杭州（正しくは明州、現在の寧波）にある育王（阿育王寺）の現住持である仏照に金を喜捨したところ、数品の器を以て酬いた（返礼された）中に、青い茶甌（茶碗）があったという。その後、慈照院源相国・足利義政（一四四九～七三）はこれを手し珍重したが、底に一脈のひびがあつたので、明に遣いを送り、代わりの侘びた茶碗を求めた。だが明では、匠が六つの鉄釘でこれを束ねたものを遣わしてきたが、その絆が「馬蝗」のようで、さらに趣きのあるものになったので「馬蝗絆茶甌」と号するようになったという（本文傍線部）という。

なお、相国（義政）からこの茶碗を下賜された宗臨は、義政の侍医で、角倉家の祖とされる人物である。そしてのちの享保丁未（享保十二年、一七二七）の春に、『馬蝗絆茶甌記』の筆者である伊藤東涯は、宗臨九世の孫玄懐の家でこの茶碗を見ることができたという。さて、このように『馬蝗絆茶甌記』では、「馬

蝗の如き絆」と言いながら、「馬蝗」が何なのかについては説明していない。そして以前は一般に、「馬蝗絆は、カスガイの中国風呼称」（『図説茶道大系』角川書店、一九六四年）とだけ説明されていた。しかしその後、馬蝗＝蝗（イナゴ）の一種ととらえた、より踏み込んだ解説が加えられ、「その破れ目を繕う鏝の風情が、あたかも馬の尾にとまる蝗に似ているためにつけられた」（『茶の湯美術館』角川書店、一九九七年）などの説明がみられるようになった。

(3) 二つの馬蝗絆とその伝来

ところで、いわゆる馬蝗絆がある青磁茶碗として伝世しているものには、この東京国立博物館蔵品（写真1）のほかに、現在マスコロ美術館所蔵となっている大阪の豪商である平瀬家旧蔵の茶碗がある（写真2）。

この二つの茶碗は、形や作行はほぼ同じ（輪花茶碗）であるが、ひびのある個所が異なり、東京国立博物館蔵のものは「馬蝗」のような鏝が六ヶ所なのに対し、平瀬家旧蔵の方は鏝が三ヶ所である。

また、伝来を比較すると以下の通りである。
i 東京国立博物館所蔵の「馬蝗絆」（写真1）

平重盛・足利義政→吉田宗臨→(宗臨九世孫)玄懷→室町三井家→東京国立博物館

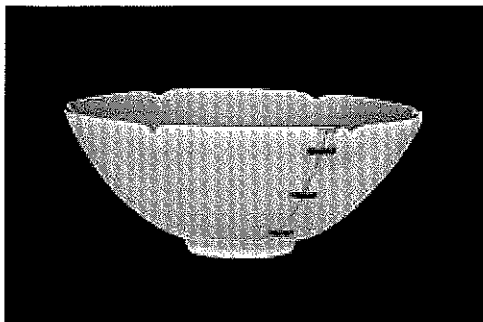


写真2 (マスプロ美術館ホームページより)

ii マスプロ美術館所蔵の「馬蝗絆」(写真2)
 曲直瀬道三(医師)→織田有楽斎→大阪・平瀬家→マスプロ美術館(愛知県日進市)
 では、この鉄釘の鏝(かすがい)が何に見えるか。すなわち「馬蝗」とは本来、中国では何を意味していたのかについてみることにする。

(4) 蝗と、馬蝗≡馬蟻(蟻蟻)
 蝗(イナゴ)は周知の通り、羽根と足を持つ

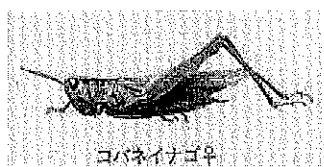


図1 蝗(イナゴ) (『生物大図鑑(4)昆虫1』世界文化社より)

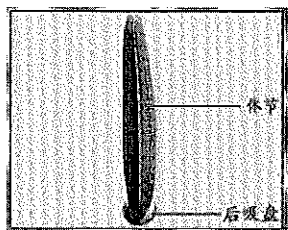


図2 馬蝗(馬蟻) = (ヒル) (『百度百科』より)

つ直翅目の昆虫である。そして中国語でも日本語と同じように、「蝗」は一文字だけで、イナゴやバッタを意味する。だが、蝗(イナゴ)を、馬の文字を含む二文字の熟語で示すならば「馬(蟻) 蟻」であり、「馬蝗」ではない。では、「馬蝗」は何かというと、これは蝗(ヒル、英語: leech)のことである。すなわち、ミミズと同じ環形動物で、体は細長く、体の前端と後端に吸盤を持つのが特徴である。また、大型動物の血を吸うものがよく知られて

とはないでしょう(恰似蟻蟻釘了驚驚屯、寸歩不教離)と言っていた(注:丁、釘≡釘[ding])。

ところで、ヒルは唾液の中に、血液の凝固を妨げる成分(ヒルジン、ヘパリンなど)を含むので、水蛭(生薬名:スイテツ)は、古来より中国で薬として使われていた。たとえば、一〇二世紀頃の成立とされる中国最古の薬書『神農本草経』にも、「水蛭、味咸、平。主逐恶血瘀血」として収載されている。すなわちヒルは、中国においては健康のために有用な存在であり、人や家畜の血を吸う害虫というだけでなかった。また西洋医学でも、早くからヒルの薬効が注目され活用されていた。

以上のように、中国語に特有な熟語表現や、発音との関係から意味を考えてみると、馬蝗は蝗(イナゴ)ではなく、蛭(ヒル)のことであった。また、元時代の有名な『酷寒亭』でも歌われたように、茶碗のひび割れがしっかりと修復され、びったりくっついている様子は、特有な吸盤を持つヒルを想像させたのではないかと思われる。

(5) さいごに「天目山蛭」

ところで今、馬蝗≡ヒル説により、ヒルに対する生理的な嫌悪感から、青磁茶碗・馬蝗絆の美しいイメージが損なわれることが少々心配である。そしてこれが、たとえこれまでイナゴ説の誤りに気づいた人がいても、積極的に指摘されなかった理由の一つではないかと思われる。

そこで余談ながら、「天目山蛭」(学名: *Haemadipsa tsumushana*) について紹介する。これは、いわゆる天目茶碗と同じように、中国浙江省にある天目山に由来する名称を持つ山蛭(ヤマビル、英語: land leech)で、浙江・湖北・河南・四川省などに生息するものだが、その俗名は「日本山蛭」であるという(注:蛭には多くの種類があるが、一説では、中国では「水蛭」と「山蛭」に分けられ、中国における「山蛭」の代表的なものに「天目山蛭」と「海南山蛭」があるという)。

するとここで、足利義政らが青磁茶碗の鉄釘をみて思い描いたのが「山蛭」だとすると、「馬蝗は、天目山蛭(俗称、日本山蛭)のこともかもしれない」と言えるであろうか。馬蝗は、中国では一般に「水蛭」のことをさす。だが、日本では馬蝗が「ウマビル」と訓読されていたようで、実際にウマビルという名の

いる。

なお、蛭(ヒル)が「馬蟻(馬黄、蟻蟻)」とよばれるようになるのは、腹の部分が黄色いからとされ、宋代に『本草衍義』(一一一六)を編纂した寇宗奭(こうそうせき)は、「汁の人は、大きいものを馬蟻、腹が黄色いものを馬蟻と謂う(汁人谓大者为馬蟻、腹黄者为馬蟻)」と述べている(注:汁(へん)は北宋の首都。現在の河南省開封市で、中国でいう「東京」)。そして、蟻と蝗は、発音が同じ「huang」なので、「馬蟻」は「馬蝗」とも書かれた。

汪玉林教授の御教示によると、たとえば、現在最古の戯曲脚本である南宋時代の『張協状元』という劇(第三十番)に、「馬蝗(ヒル)が驚驚(サギ)の脚を刺す(馬蝗丁住驚驚脚)」という用例があるという。また、元時代の楊頭之(ようけんし)が作った『酷寒亭』という曲でも、類似の文章が、「びったりとくっついて離れない」という比喩的表現として使われているという(鄭孔目風雪酷寒亭)。それは、聖葉王が、泣いている子供に心を動かされ、「よかったら、私についてきなさい。」と声をかける場面、「サギを刺したヒル(蟻蟻)のように、私から一歩たりとも離れるこ

ヒルは日本各地に生息しているという(倉澤行洋教授の御教示による)。

そのため、心ひそかに「馬蝗は天目山蛭かもしれない」と考えることが許されるのであれば、我々は何となく天目茶碗のことを連想して、あの青磁茶碗に対して、これまで以上に親しみとロマンを感じるができるかもしれない。ただし、これはあくまでも筆者の希望的推測である。

理
事
会

平成二十四年度第二回理事会は、九月二日(日)午後二時から、池坊短期大学第一会議室で行われた。参加者数は、参与一名、理事十五名、幹事七名の、計二十六名で、最初に谷会長挨拶があり、そのあと、以下の議題の順序に基づいて討議がなされた。

- 一、各担当理事より事業報告
- 二、会長候補者推薦委員会委員の選出
- 三、平成二十五年度総会・大会
- 四、創立二十周年記念事業
- 五、その他

第一号議題では、中国湖南省での研究会（二十九名参加）・各地例会の実績、会報・会誌の発行状況が担当理事から報告された。これらのうち研究会については、一部の会員から、国内での開催分が廃止になったことについて疑問の声が上がっているという意見が出されたが、以前に比べて例会が各地で新たに立ち上がり、地方の会員でも参加できる催しが多くなってきたので、国内研究会の当初の役割は終えたという判断から廃止した、という再度の理由確認が示された。また会報では、七十四号から印刷業者を変えて、費用や仕上がりの点で向上を図る旨、担当理事から事後報告がなされた。

第二号議題では、次期会長の候補者推薦委員会委員として三名が推薦され、承認された。これに伴って、次回理事会までに、候補者推薦委員会を開き、会長候補者を選出してもらうことも決定した。

第三号議題では、最初に谷会長から、平成二十五年年度総会・大会を金沢で開催してはどうかという案が提示され、金沢例会の担当理事からも開催受け入れに前向きな意思表示があった。学会創立二十周年記念事業との兼ね合いから開催場所を考へては、という意見も

二、三あったが、最終的に、金沢での開催案が承認された。今後は、六月八日・九日の開催を念頭に置きつつ、事業の詳細を詰めていくことになった。また、この総会・大会は、学会創立二十周年記念事業の一環として位置づけることも確認された。

第四号議題では、記念事業の一つとしてすでに進んでいる二十周年記念誌について、担当理事からその進捗状況について報告があった。またこれとは別に、倉澤参与から、記念事業に関して要望が出され、これまでの二十一年間に不十分な分野であった内面的研究（心・思想・宗教・哲学などの面）をこれからの十年でさらに深めていくために、「これからはこうあつてほしい」というシンポジウムを記念事業の企画のなかに入れてほしい、という意見を出された。小泊理事からも同様の意見が出され、来年度の大会の内容は、両氏の意見を踏まえた上で検討する、ということも承認された。このほか佃理事からは、東京や京都など、総会・大会とは別の会場でシンポジウムを開催してはどうか、との意見が出され、これについては、役員交代を踏まえた上で検討していく、ということが確認された。

第五号議題では、三点ほど報告があった。

「花」としては、ここに再度同じテーマでお話する事にした。

ここに至る契機となったのは、この初夏に開催した展覧会『中世人の花会と茶会』であった。ここで、青磁の将来、どのように青磁が伝世したのか、また、茶の湯の道具としての南宋の青磁の位置を考え直す事となったのである。花を飾る器としての青磁を、14世紀頃の絵画に見ると、如何にも元時代の青磁と思われる大型の花瓶が描かれている。これは、恐らくその当時将来された器物を用いたものであることは、容易に考えられるところである。これは、博多や鎌倉等の遺跡から出土する大型の香炉や壺、瓶などから、また寺院に伝世している青磁花瓶や香炉などから証することが出来る。

14世紀前半の鎌倉では唐物が流行し、唐物を商う市が立つほどであったという。それはまた、元との交易が盛んであった事も示している。これに対して、京都では新しい唐物を取り入れるのにやや消極的であったといわれ、15世紀初めになって足利義満の頃に唐物の輸入が盛んになり、様々な形態で流入することが流行し始めている。そこでは、唐物

の花瓶と盆が大切な道具となっていた。その上に重なるように、茶の湯が盛んになった。しかしながら、16世紀になって茶の湯の道具としての青磁は、花瓶が使われる事はあつたが、茶碗は殆ど使われていない。この点に注目して、南宋青磁の将来の様相を考へるのが、今後の課題である。

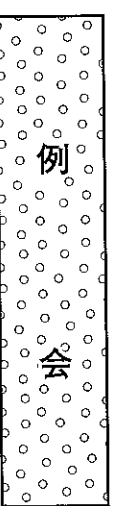
「薩摩焼の茶碗について」

松村真希子

薩摩焼は旧島津藩領内で焼かれたやきものを指す名称で、その中で茶碗はまだ十分な研究がなされていない。薩摩焼の茶入が、江戸時代初期から茶会記や日記に数多く記されているが、茶碗の記録は十七世紀前半の二件だけで『隔メイ記』にある。その後は十九世紀に入ってから三件だけであった。また島津家文書には薩摩焼を贈答品として使った記録が多々みられるが、茶碗の記述は少なく、茶碗の贈答の価値が、茶入のそれではないようだ。また窯跡の出土資料は白色陶器の無地の茶碗が大半を占め、その編年を追うことができる。

その白薩摩茶碗の中で、特異なものに「捻り花茶碗」が六点あり、十七世紀前半に作ら

第一点は、すでに本学会との共催が承認されている「女性研究者による茶文化研究発表会論文募集」について小泊理事から再度の説明と案内があった。第二点は、矢野理事の提案になる、アメリカ・サンフランシスコ「お茶三昧」企画の広報協力についてで、英語で送られてきている案内を翻訳し、学会のホームページにそのイベント情報を載せることが承認された。第三点は、学会誌バックナンバーの販売価格についてで、今後の一括購入の条件・価格については、会長と事務局のあいだで協議して決める、ということになった。



東京例会

(平成二十四年九月八日)

「茶の湯の南宋青磁」

(二〇一一年四月二十三日の続きとして)

西田宏子

前回は体調不良で、筒花人に絞って話をした。その折に考えていた事、すなわち将来された青磁の器全体に関して、整理を試みた

れた「御判手」と呼ばれる藩主の印が見込みに押された茶碗であると紹介されてきた。しかし同型の茶碗に紫釉がかけられた茶碗があり、島津斉彬の集成館事業で開発された紫釉の使用が考えられ、十九世紀前半に作られた可能性があると思われる。

また黒釉が流しかけられた半筒茶碗もある。景色を意識して釉が美しく重ね掛け流され、口縁部には微妙な歪みをもたせ、見所が多々あるもので、薩摩焼の茶陶の中で代表的な位置にあるといつてよいだろう。しかし日記や茶会記、島津家文書の中に、黒釉茶碗や筒茶碗などの名称が現れたことはなく、また出土資料からも後を追うことができない。同様のことは遠州が関わったとされる「薩摩南十手茶入」にもいえることから、黒釉筒茶碗は今後の研究の課題として重要な作品群と考えている。

(平成二十四年十一月十七日)

「中国宋代の「酥乳茶」文化

～文人達の茶詩を通して～

祁政

従来の中国「茶文化」研究において、「酥乳茶」は殆ど注目されてこなかった。漢民族

る。

王朝の宋代の「酥乳茶」文化についての研究が全くの空白のままとなっていた。「酥」は「バター」で、「乳」はミルクで、「酥乳茶」はバターやミルクなどの乳製品が入った茶のことである。今回の報告では唐代と宋代の文学作品についての分析を通して、宋代の「酥乳茶」文化の実態がある程度明らかにしたものである。唐代李泌の詩句が示すように、唐代の皇室が酥を茶に入れたりしていた。あくまで徳宗個人の行為ではあるが、酥と茶の両方を嗜好品とする人にはごく自然な行為と捉えた。北宋になると、蘇轍、張商英の詩で表したように、北方の民間の喫茶習慣として酥などの乳製品を茶の中に入れていた。南宋になると、劉一止、曾幾、陸遊、虞儵の作品を通して、南方の文人達は北方民間の粗末な喫茶習慣と異なる文脈で、文人の風雅な喫茶として、或いは隠居生活の飲み物として酥を茶の中に入れていたことが明らかになった。宋代において、中国の漢民族も文人も乳製品を入れた茶を飲み、楽しんでいたことが証明できた。よって、中国茶文化は決して茶の中に何にも入れない「清茶文化」だけではなく、「酥乳茶」をもう一つの重要な柱として、より多様なものであり、重層性のある喫茶文化だといえ

例会の二案内

東京例会

一月十九日(土) (会場: 東洋英和女学院大学六本木校舎 午後二時)

「西洋人の見た茶の湯」(飯) 谷村玲子
「南蛮文化と茶の湯」(飯) 宇野千代子

北陸例会

三月二十三日(土) (会場: 未定)

内容未定
(内容が決まり次第、ホームページにてお知らせいたします)

高知例会

(会場: 高知県立文学館慶雲庵茶室 午前十時)

二月十日(日) (会場: 未定)
「石州流三百ヶ条不白答(中) 常用文」 柏井 武

一般の方々が茶の湯に親んでもらうための茶席を設ける。

会場 高知県立文学館慶雲庵茶室

時間 十時から十六時まで

開催予定日 高知新聞伝言板に掲示

(会費三百円)

お知らせ

* 来年度の大会は六月九日(日)に金沢で開催する予定です。詳細は決まり次第、ホームページにてお知らせいたします。発表を希望される方は八〇〇字程度の要旨を添えてお申し込みください。応募者多数の場合は、審査の上決定いたします。

* 新刊紹介

『世界茶化学術研究叢書 陸羽『茶経』の研究』

本書は、陸羽『茶経』に関する基本文献であると同時に、日中共同研究の最先端の成果である。

熊倉功夫・程啓坤編 宮帯出版社

(定価三、五〇〇円+税)

* 年会費を未納の方は、同封しました払い込み用紙にて至急お払い込みくださいますようお願いいたします。